九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『拍案驚奇』の評釈について

日下，翠
関西大学

https://hdl.handle.net/2324/16092

出版情報：東方. 54, pp.26-29, 1985-09. 東方書店
バージョン：
権利関係：

『拍案驚奇』の評釈について

日下　翠

一九八二年、中国で『拍案驚奇』四十巻本（上海古籍出版社　章培恒整理　王古魯注釈）が発行されたことは、われわれの記憶に新しい。この書は、わが国の日光輪王寺慈眼堂より発見された尚友堂版『拍案驚奇』（明崇禎元年刊行）をもとにしている。この尚友堂原版は、中国では早くに失なわれており、不完全な三十六巻本が通行していたにすぎなかった。中国の研究者はこの書により、ようやく、完全な四十巻本を見ることができたのである。まずはめでたいことといわねばならない。

しかし、文章は完全なままではなく、不適当と思われる部分は削除し、或いは書き改めるなどしてある。やむをえない処置とはいえ、やはり残念というべきであろう。が、それ以上に残念なことは、原版に付されていた、原作者即空観主人（淩濛初）自身がつけた評釈をはぶいてしまったことである。できればこの評釈を付した形で出版してもらいたかったと思うのは、筆者ばかりではないと思う。

この評釈は、李田意校本『拍案驚奇』（香港　友聯出版社　一九六六年）には収められており、研究上極めて貴重な資料となっている。（なお、章培恒氏は、この李田意校本を、慶応大学の金文京氏より送られたことを、校点説明で述べられている）

この評釈について、李田意氏は、論文「THE EDITION OF THE PO-AN CHING-CH'I」（李田意校本『拍案驚奇』所収）の中で、次の如く述べておられる。（原文は英語である）

「これ（『拍案驚奇』をさす）が、尚友堂の原の木版から印刷された、最初のコピーの一つであることは、ほぼ確定的である。その表題のページは、完全なままで残っている。そしてこれは、その本を、即空観が評釈して、さし絵を入れた物語の全集であると述べている。その文章は事実である。なぜならば、本は多くの欄外、或いは行間に書いた評釈を、八十のきれいなさし絵――一つの話に二枚ずつ――と共に含んでいるからである。」

李田意氏はさらに続けて、後の版本が評釈を削り去ったことを、極めて残念なことであると述べておられる。氏が述べる如く、これらの評釈が貴重なことは、どれほど強調しても強調し足りないであろう。

ここでは特に、その貴重さを具体的に

示す例として、第三十五巻「看財奴刁買冤家主」(注)をとりあげてみたい。

この物語は、元雑劇「看銭奴が冤家債主を買う」をもとにしており、戯曲をそのまま小説に書きなおしたものである。

ところが、このもとの雑劇には、元刊本、息機子本、元曲選本の三種があり、内容に異同がみられる。但し、息機子本と元曲選本とは、ほぼ一致するため、以下では、元刊本と元曲選本の相違を比較することとする。

結論を先にいうと、元曲選本の内容は、元刊本のそれをもとに改作を加えたものであり、その結果、ストーリーに些かの矛盾を生じている。そして、その矛盾に、淩濛初が気づいたあとが、評釈よりうかがえるのである。元人の戯曲の改作に、明の文人淩濛初がどのようなとまどいをみせたか、それはわれわれにとっても、大いに興味ある問題ではないだろうか。

まず、元刊本と元曲選本を比較して、直ちに気がつくことは、元曲選本では楔子にあたる部分が、新たにつけ加わっていることである。なお、余談であるが、楔子とは、くさびという意味で、本来は正式の套曲以外に、くさびの如く臨時にうちこまれた、短い一、二支の曲をさしていった。白話小説などで、導入部という意味で使われるようになるのは、清代以降である。が、ここでは便宜上、楔子・折とは、元曲選が表示している一段をさすこととする。元曲選本『看銭奴』の楔子のあらすじは以下の如くである。

周栄祖は汴梁曹州曹南の人。妻は張氏、子は長寿といった。祖父の周奉記は仏門を敬ったが、父は仏を信じず、祖父のつくった寺院をとりこわして家をたてた。家が完成するころ、病で亡くなり、人々は不信心のむくいだとうわさした。周栄祖は都へ、科挙をうけにゆこうとした。妻の張氏がつれていってくれと頼んだため、幼い長寿もつれ、家は人をやとって守ってもらうこととし、祖先伝来の財産を、塀の下に埋め、三人で都へ旅立った。

以上であるが、元刊本にはこの部分はなく、第二折で周栄祖がはじめて登場するくだりも、元曲選本とは大いに異なっている。次にその部分を訳してみよう。

〔正末、そまつなみなりをし、女役、子役と共に登場、いう〕私は姓は周、名は栄祖、字は伯誠と申しまして、洛陽に住んでおります。妻は張氏、子供は長寿と申します。家財が傾いたために、三人で曹州曹南へと親戚を尋ねてまいりました。けれども、不運なことに、さがしあてられず、その上、こんな大雪にみまわれました。妻よ、どうしたものだろうか。

(唱) ゆきなやみ、家はいづくに。天地老いて山さえ頭の白く、四野に凍雲垂れ、万里は氷花おおえり。あいにくに、われら三人は郷里の外。

この部分は元曲選では以下の如くである。

〔正末周栄祖、女役と子役をひきい、登場、いう〕私は周栄祖でございます。みうちは三人家族で、妻は張氏、子供は長寿と申します。試験をうけにゆきましたが、命運つたなく、うかりませんでした。それはまだしも、家に帰ってみれば、ことごとくおもわくはずれ。私の祖先が残した財産を、塀の下に埋めておいたところ、そっくり人にとられてしまいまし

た。それからは衣食にもこと欠き、やむなく三人そろって洛陽へ親戚を尋ねて助けてもらおうといたしましたが、この時も運悪く会えずじまいで帰ってまいりました。おりしも真冬で、毎日大雪がふっております。この旅路は、なんとも苦しくてたまりません。

この両者を比較してみて、注目すべき相違は、元刊本では、周栄祖は洛陽の田舎親父であり、貧窮したため、親戚をたよって曹州曹南へとやって来ているのに対して、元曲選本では、もともと曹州曹南の読書人としている点である。つまり、一家そろって試験を受けに上京し、そのため留守宅の塀の下へ財産を埋めておく、という楔子のプロットをつけ加えたために、それにあわせて、もともと曹州曹南の人であったと改めたのである。

ところが、元曲選本で周栄祖は、雪に悩みつつ、「あいにく、われら三人は郷里の外」と唱う。曹州曹南は故郷であり、決して「郷里の外」ではない。元刊本の歌辞をそのままにしておいたために生じた大きな矛盾である。

この点につき、淩濛初は、小説の終りで一切があきらかになり、賈仁（塀の下に埋めた金を横領し、長寿をだまして買う悪人。看銭奴とは彼のことである）が周栄祖の金を盗んで金持ちとなったことが判明するシーンで、皆が「あの貧乏人の賈が、急に大金持ちになったのは、金を盗んだためだったのか」と驚くくだりに、「同郷の人は、賈の出身を知りながら、周を知らぬ。何故であろう。」と評釈を加えている。たしかに、故郷の人が、一人も周栄祖を知らぬというのは奇妙である。これが改作ゆえに生じた矛盾であることはいうまでもない。しかし、元刊本を読まぬ（元刊本は、一般には手に入らぬものであったため、読むことのできぬ）淩濛初には、それが何故かわからず、わからぬままに疑問を書いておいたのである。

又、この他にも、元曲選本でいえば楔子にあたる部分に、興味深い評釈がある。小説では、周栄祖の父が、仏院をこわし、家を建てるくだりは、

「屋敷をつくるのに、材木やレンガ、瓦などを買うのが惜しく（不捨得另辦木石磚瓦）、その寺院をとりこわして用いました。」

とある。さらに、妻子を連れてゆく場面は、

「妻が若く、子が幼いため、残してゆくにしのびず（只因妻嬌子幼、不捨得拋撇）、相談して三人でゆくことにしました。」

とあり、この二個所の「不捨得」（あることをするに忍びない、の意。元曲選には、この語はない）の上に、それぞれ評釈がつけられている。先には、「この不捨得の念がまさしく困窮の根である」とあり、後には「この不捨得もまた然り」とある。作者がわざわざ、このいいわけめいた評釈をつけたのは何故であろうか。あるいは、作者はこの部分に、ある種の不自然さを感じたのではないだろうか。つまり、明の文人たる彼にとって、家を空にして財産を埋め、年若い妻と幼な子をつれ、はるばる科挙をうけにゆくということは、かなり不自然な思いを抱かせるものであったのではないだろうか。し

かし、元曲選本がこう書いている以上、これに従う他はない。そこで二つの不捨得を上手につかい、いいわけめいた評釈をつけ加えたのではないだろうか。つまり、先に述べた個所では、読者として疑問をあらわした彼が、この個所では作者として、一種のいいわけをしていると思われるのである。そしてこの、読者であり、作者でもあるという態度こそは、『拍案驚奇』の作者にとって、何よりもふさわしいといえよう。なぜならば、『拍案驚奇』は、完全な創作集とはいえず、大多数が、先に存在する作品や題材をそのまま、小説に書きなおしたものであるからだ。この評釈をみるかぎり、まさしく淩濛初は、作者であると同時に、すぐれた読者でもあったのである。

なお、これらの題材の中に、元雑劇が相当含まれることから、読む作品、いわゆるレーゼ・ドラマとしての元雑劇が、明代の白話小説の流行に、大きく貢献した一つの証拠をみることができる。唱(うた)の部分によって正式の文学の仲間入りを許されていた戯曲が、その唱(うた)を省いた、ストーリーの部分で享受されるに至ったのは、画期的な変化といってよいであろう。

ここにあげた例はごく一部にすぎず、その他の評釈も、本文と読み比べてみると、極めて面白く、興味深い。これらの評釈が、中国の研究者の目にふれる機会の少いことは、何としても惜しいといわねばならない。無理を承知の上で、評釈を付した形での、再度の発刊を、心から希望する次第である。

（関西大学）

（注）：わが国の滝沢馬琴は、この小説のプロットを、『新編金瓶梅』に使用している。長寿にあたる、引取られた乞食の子が、後の西門屋啓十郎である。

唐詩でたどる中国の山河。

好評発売中！

唐詩旅情

蔡子民著

（前中国大使館参事官）

日本人に愛唱されている唐詩81首を地域別に分け、それぞれに解説、現代語訳を付す。

各地ごとにまとめて、唐詩鑑賞。いろいろの詩人の、その土地についての詩情を知ることができる。

◉体裁——四六判・上製・二四〇頁

定価一六〇〇円

隠花植物——宦官のすべて

重版出来

宦官物語

——男を失った男たち——

寺尾善雄著　定価980円

東方書店

最寄書店で・東京神田神保町1-3

出版部営業電話…(03)233-1001